

講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書3

名分塚田遺跡2

1987年3月

島根県鹿島町教育委員会

講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書3

みょう ぶん つか だ
名分塚田遺跡2

序

ご存じのように当鹿島町には史跡佐太講武貝塚をはじめ、古浦砂丘遺跡、銅劍・銅鐸を出土した志谷奥遺跡、大規模な古墳群であることが判明した奥才古墳群など縄文時代に始まる多くの著名な遺跡が知られています。

このたびは、講武地区県宮圃場整備事業に先立ち、名分塚田遺跡の二次調査を実施いたしました。調査地を限っての調査ではありましたが、豊富な中世遺物の出土をみ、また、古代の墨書き土器や硯に転用した須恵器など特異な遺物も出土し、付近に何らかの公的な施設があったことを推測させます。さらに弥生時代の土器は、この講武で米作りがまさに始まった時代を示すものということであります。

圃場整備事業はひきつづいて行われますが、こういった文化財の調査にもご理解をいただき、講武という農村のおこりから現在のような美しい連田となるまでに流された先人の汗に思いをいたすことと、明日への展望を開きたいものと思います。

終わりになりましたが、調査にあたってご協力をいただいた土地所有者の方々、ご指導をいただいた島根県教育委員会など、関係各位の皆さんに厚く御礼申し上げて、報告書発行のごあいさつとさせていただきます。

昭和62年3月

鹿島町教育委員会

教育長 加納益雄

例　　言

1. 本書は、鹿島町教育委員会が実施した講武地区県官園場整備事業に伴う名分塚田遺跡の第二次発掘調査の記録である。

2. 遺跡は、島根県八束郡鹿島町大字名分987番地3他に所在する。

3. 調査は昭和61年5月31日から7月3日まで実施した。調査体制は以下の通りである。

事務局 井ノ口隆義（鹿島町教育委員会教育次長）

曾田 稔（同 社会教育主事）

調査員 赤沢秀則（同 主事補）

調査指導 松本岩雄（島根県教育庁文化課主事）

作業員 石倉福重、山田莊治、山田忠治、石原幸男、石原重徳、中島松栄、安達悦子、安達キヨエ、安達徳子、長野昭子

遺物整理員 安達悦子、安達キヨエ、安達徳子、長野昭子、丹羽野輝子、竹内輝明

4. 調査にあたっては、土地所有者安達勝太郎、井山良喜、井上寛治の各氏に多大な協力を得た。また、松江農林事務所耕地第一課、有限会社豊洋土木、鹿島測量設計有限会社の方々にも協力をいただいた。あわせて感謝の意を表したい。

5. 出土遺物のうち、骨片については、鳥取大学医学部法医学教室井上晃孝助教授に仲介の労をいただいて、同大学医学部解剖学第2講座井上貴央助教授に分析をいただいたうえ、玉稿をいただいた。また、出土遺物については島根県立博物館の村上勇氏にご教示をいただいた。あわせて記して謝意を表したい。

6. 本書に用いた方位は、国土調査法による第Ⅲ座標系X軸の方向を示す。したがって磁北より7°12'、真北より0°32'東の方向を示している。また、実測図中の高度値は海拔高である。

7. 本書の編集、執筆は、曾田・赤沢が担当した。

8. 出土遺物は、鹿島町教育委員会で保管している。

目 次

序	
I 調査の経過	1
II 位置と歴史的環境	2
III 調査の概要	4
1. 一次調査	6
2. 二次調査	8
IV 名分塚田遺跡より検出されたシカの骨について	19
V 小 結	23
出土遺物観察表	25

挿図目次

図1 鹿島町位置図	1	図版1 名分塚田遺跡周辺航空写真
図2 名分塚田遺跡と周辺の遺跡	3	図版2 名分塚田遺跡全景
図3 名分塚田遺跡調査区位置図	5	図版3 名分塚田遺跡上層
図4 一次調査第1調査区平・断面図	6	図版4 杭列検出状態・杭列横断面
図5 二次調査区平面図	7	図版5 鹿骨検出・弥生土坑
図6 土層模式図	8	・弥生土器出土状態
図7 鹿骨出土状態実測図	9	図版6 中世遺物(1)、(2)
図8 杭列検出状態実測図	10	図版7 中世遺物(3)、中世須恵器、 磁器、軒用鏡、砥石
図9 中世・古代遺物実測図(1)	12	
図10 中世・古代遺物実測図(2)	13	図版8 弥生土器
図11 中世・古代遺物実測図(3)	14	
図12 弥生土坑実測図	16	
図13 弥生土坑出土遺物実測図	16	
図14 弥生土器出土状態実測図(1)	16	
図15 弥生土器出土状態実測図(2)	16	
図16 弥生土器実測図	17	

I. 調査の経過

鹿島町講武地区は、島根半島有数の水稻耕作地であり、鹿島町全体の水田面積270haのうち講武地内は183haを占めている。このうちの約半分については昭和30年代に区画整理事業が行なわれたが、依然として排水は不良のうえ、道水路網は整備されておらず、同地においての圃場整備事業の実施は関係者の強い要望であった。こうした要望を受けて、昭和59年度から講武地区営農圃場整備事業が133haを対象として開始されている。

一方、この事業計画地内には、講武川流域条里制遺構をはじめとする遺跡が存在しているため、関係者の度重なる協議を経て、昭和59年度から以下のように発掘調査を実施してきている。

名分塚田遺跡一次調査（昭和60年1月）

名分湯戸遺跡群発掘調査（昭和61年2～3月）

名分塚田遺跡二次調査（昭和61年5～7月）

講武地区遺跡分布調査（昭和61年10～12月、国庫補助、南講武草田遺跡、南講武大日遺跡）

今回の名分塚田遺跡二次調査は、一次調査の結果をもとに松江農林事務所、町農林課と協議を重ねたが、昭和60年9月21日の協議により、昭和61年度中に基本的に町費負担において二次調査を行なうという結論に達していた。調査は、当該地での圃場整備事業が、主に耕作土層の移動に限られ、遺物包含層に達さない計画であったため、新たな排水路の掘削によって包含層が搅乱される部分を発掘調査することとした。

こうして昭和61年5月31日から7月3日まで実働19日間の調査を実施するところとなった。途中、梅雨の期間と重なったため、調査区壁の崩落、漏水と調査は困難をきわめたが、一次調査と同様、中世、古代の遺物包含層が検出

された他、杭列や墨書き土器の検出、さらに下層の弥生時代中期の包含層の発見など、多様な遺構、遺物を検出して調査は終了した。



図1 鹿島町位置図

II. 位置と歴史的環境

名分塚田遺跡は、島根県八束郡鹿島町大字名分987番地3他に所在する。この周辺は、島根半島部に開けた小谷が沖積作用によって小平野をなしている部分にある。この講武盆地は面積約180ha、半島部では持田・川津平野とならんだ広い耕地面積を有する。この盆地は、谷奥から流れ出す講武川によって作られた肥沃な地味により、古くから水稻耕作地として格好の条件を備えていたものと考えられる。

この平野をめぐっては、縄文時代早期末から中期にかけての佐太講武貝塚さたのみづうかが知られており、これは現在の佐陀川沿いに開けた潟湖（『出雲國風土記』にいうところの佐太水海、恵養波の前身）をそれぞれ南と西にひかえた立地であり、こうした潟湖からヤマトシジミなどの魚介類を採集し、周辺の山野に鳥獣、堅果類を求めていたものと考えられる。

周辺部における弥生時代の開始は、古浦砂丘遺跡の成立に求められる。この遺跡は、潟湖の低湿地を背後にひかえた砂丘上に位置する墳墓群で、こうした低湿地を湿田として開発した人々を葬ったものと考えられる。

名分塚田遺跡に隣接しては、佐太前遺跡が前期後半に成立する。この遺跡は大規模な集落跡と考えられ、その存続期間も長い。この集落を母集落として講武盆地の開拓がおこなわれたものと考えられる。さらにこの時代には「恵養波」の南岸の山ふところに銅鐸2、銅劍6を埋納した志谷奥遺跡しだにあさがあり、また講武盆地の南縁では、四隅突出型墳丘墓と考えられる南講武小廻遺跡が後の数多い古墳群に先行して築かれている。

古墳時代には講武盆地をめぐる丘陵上に数多くの古墳群が築造されたことが知られている。特に名分地域には、奥才古墳群、鶴灘山古墳群、名分丸山古墳群など、前半期にさかのぼる群集墳が知られており、古墳・群とともに規模の大きいものが多いようである。これらの古墳群は、講武盆地内に成立した集落群による水田の開拓がさらに進み、その指導的役割を果たした人々を古墳を築いて葬りうるまで生産力の向上があったことを示すものであろう。

古墳時代後期には、講武盆地のほぼ中ほどの北講武地区に横穴式石室を内部主体とする古墳も知られている。これら以外にも横穴が多数分布することが知られており、古墳時代後期の段階には現在の集落の原形がすでにできあがっていたものと考えられる。

奈良時代の『出雲國風土記』をみると、具体的な記述はないが、この盆地は島根郡の余戸里と生馬郷に、盆地西端の佐太前遺跡の立地した周辺は、秋鹿郡神戸里に含まれると考えられている。名分塚田遺跡の位置する付近は、島根郡生馬郷に含まれていたものと考えられる。この頃に前後して講武盆地の中心部に条里制が施かれたと考えられ、「三ノ坪」といった小字名も残っている。

- 名分塚田遺跡
- 須和田遺跡
- 古能妙丘遺跡
- 谷谷廻遺跡
- 佐人前遺跡
- 南瀧元小蛇遺跡
- 奥才古廻跡
- 名分丸山古廻跡
- 多久瀧原古廻跡
- 湯坂古廻跡
- 向山古廻跡
- 船山腰根古廻跡
- 船山占古廻跡
- 延源古廻跡
- 船崎東田遺跡
- 南瀧武大日遺跡
- 岩屋古廻跡
- 的船古廻跡
- 長瀧山古廻跡
- 御体中の津古廻跡
- 寺の奥古廻跡
- 本郷廻穴群
- 御体御體穴群
- 黒谷廻穴群
- 清水廻穴群
- 黒瀧地穴群
- 黒瀧地穴群
- 半尾地穴群



図2 名分塚田遺跡と周辺の遺跡

III. 調査の概要

名分塚田遺跡は、講武川が形成する沖積平野の西端近くで、講武平野の西を限るように位置する鶴瀬山の南麓に所在している。周辺は海拔高4.0~4.5mの水田となっている。

この水田に昭和60年1月、2ヶ所の調査区を設定して試掘調査を実施した（一次調査）。この結果、第1調査区からは、中世初期を中心とするかなりの遺物の出土をみ、今回の二次調査をおこなうところとなった。二次調査は、前回の第1調査区付近で、圃場整備事業により新たに排水路が布設される部分について実施した。

同地点では、60年9月21日の協議結果にもとづき、遺構・遺物に影響を及ぼすおそれのない、地表から約30cmの耕作上の除去が終了しており、当初調査を予定した排水路予定地約160mにわたって、遺物を包含する暗褐色土までを重機によって除去した。ところがこの除去の結果、調査区の始点である南端から約60mの範囲では、暗褐色土が認められたが、これ以北ではこの上層が認められなかったため、重機によりさらに下層に遺構・遺物が包含されないと確認して、調査区を上記の約60mの範囲に限定した。

調査は、調査区を南から1~5区に区切って実施した。調査区はかなりの湧水をみ、また、調査期間が梅雨と重なったため、滞水と調査区壁の崩落に悩まされた。しかし、暗褐色土層中には中世初期と考えられる須恵器、土師質土器が含まれ、また、その下層の淡褐色土層中では2列に並ぶ杭列と鹿の骨および墨書き土器片が検出された。さらにこれらの下層の青灰色粘質土は弥生時代中期の土器を包含しており、炭化物を含む浅い土坑1を検出している。青灰色粘質土の下層は各区で若干の高低はあるが、砂層となっており、遺物を包含しない層となる。遺構・遺物は各層にわたって調査区南方に多く、北へゆくほど稀となり、北端の第5区ではほとんど遺物は検出されていない。

よって、今回の調査結果及び、一次調査の第2調査区からほとんど遺物の出土をみていないことをあわせて考えるならば、遺跡の中心部分をなすのは、二次調査区の南半と考えるのが妥当であろう。



写真1 発掘調査風景

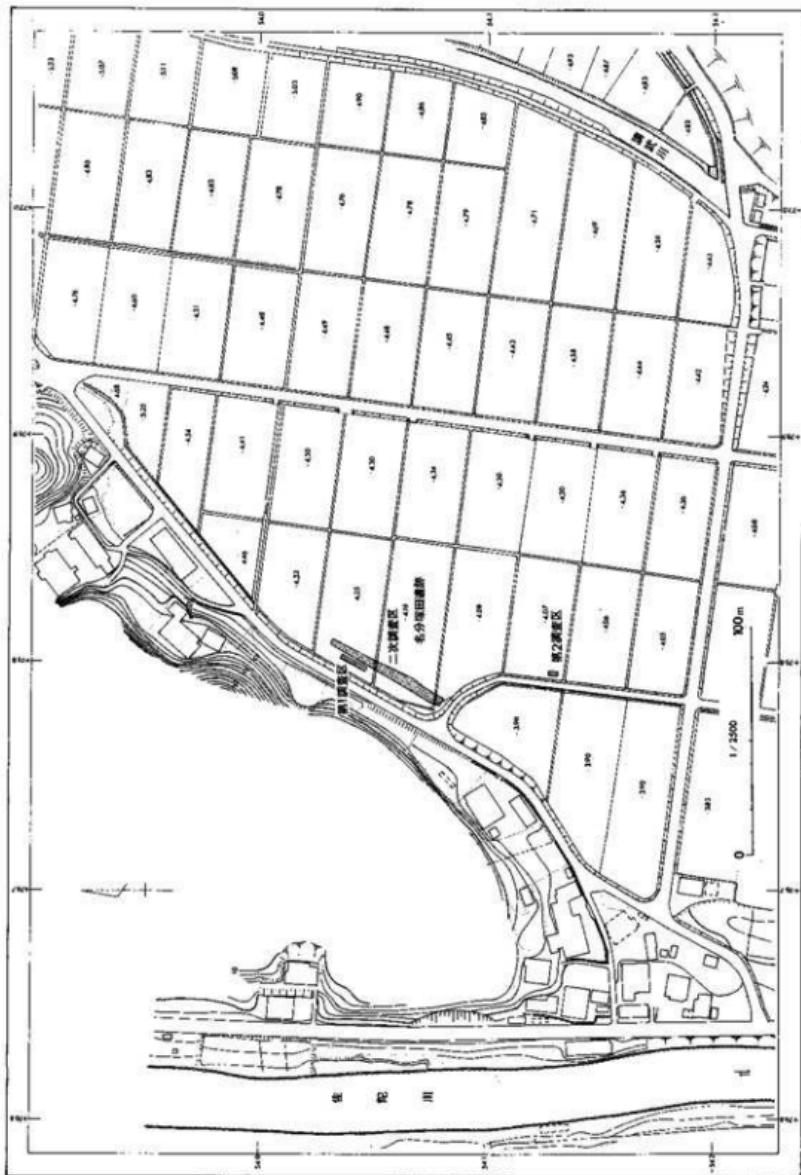


图3 名分段出土地盐调查区位置图 (1/2,500)

1. 一次調査（昭和59年度）

一次調査は、丘陵直下に位置する水田面に $12.5 \times 2\text{ m}$ の第1調査区と、丘陵をやや離れた水田中⁽¹⁰⁾に $3.5 \times 2\text{ m}$ の第2調査区を設定して実施した。

第1調査区では、現水田面下約 0.6 m に暗褐色土層があり、これに中世初頭の遺物が含まれていた。この下層の淡褐色土層中には、中世から古代の遺物が含まれている。この暗褐色土層と淡褐色土層中には約 0.1 m の間隔で3本の杭が打ち込まれていたが、このうちの1本は腐って空洞となっていた。

淡褐色土層より1層おいて下層の暗灰色土層には古代から古墳時代の遺物が含まれる他、木片や塊石が検出された。さらにこの下層の青灰色砂質土層には1本ではあるが、丸太を四分割した杭が打ちこまれていた。

以上のようにこの調査区では、中世、古代、古墳時代の遺物を含む層が堆積しており、層毎に明瞭に区別できるわけではないが、下層になるほど古い時代の遺物が多くなる傾向は認められた。

第2調査区では、土層の層厚がかなり厚く、単純な層序をなしていた。この調査区には遺構は認められず、また、出土遺物もごくわずかであった。

これらの調査結果から、遺跡は水田面では丘陵沿いの狭い範囲に限られ、かなりの量検出された遺物は、第1調査区の上方にある丘陵裾の平坦面から流れ込んだものであろうと考えた。

これらの調査結果は、基本的に二次調査の結果と矛盾するところはない。

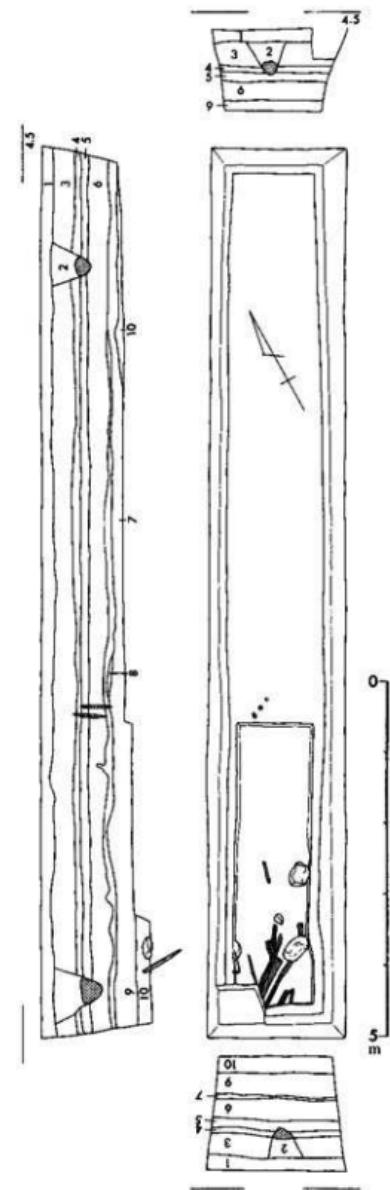


図4 一次調査第1調査区平・断面図（1/80）

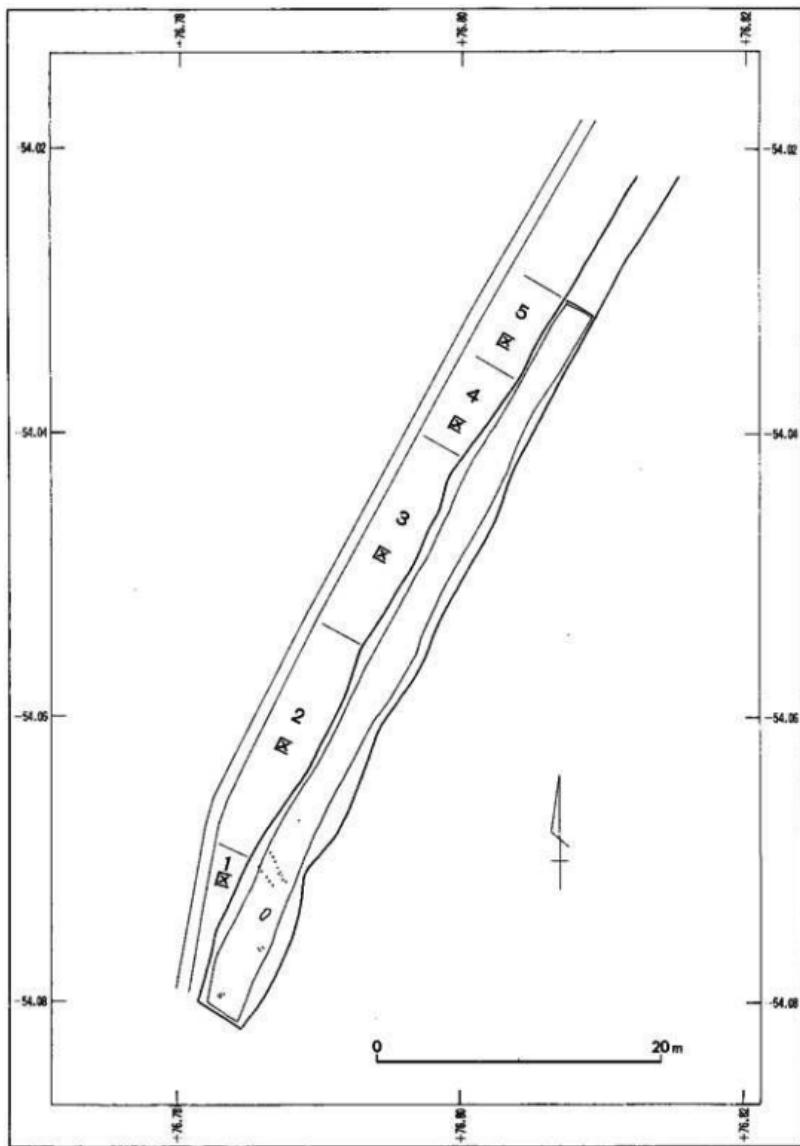


図5 二次調査区平面図

2. 二 次 調 査

二次調査区は、一次調査第1調査区（以下便宜上第1次調査区とよぶ）の東に隣接して設けた。第1次調査区は、二次調査区の3区、4区にはほぼ相当するが、この付近では第1次調査区ほどの遺物の出土は見ず、山際に近づくにしたがい、遺物の濃密な分布を示すものと思われる。このことは、第1次調査の際の水田上面の鶴ヶ山南麓平坦面に所在した当時の集落から廃棄された遺物であろうという推測を裏付けるものと考えられる。

また、第1次調査区で検出された3本の杭の続きは、二次調査区では認められなかった。しかし、遺物を包含する暗褐色土、淡褐色土は、ともに検出されている。ただし、二次調査区では、調査区北方に移るにつれ、色がやや淡くなり、また粘性を増して包含する遺物の量も減少する。

二次調査区では、中世から弥生時代にわたっての遺物の出土をみているが、全ての時代にわたって、1・2区からの出土が多く、遺跡の中心は調査区南方と丘陵縁辺部にあることが推測できた。

土 層 二次調査区での土層とその包含される遺物の関係は、暗褐色土層に中世初頭の土師質土器が、この下層の淡褐色粘質土層中に中世～古代の遺物が、1層おいて下層の青色粘質土層に弥生時代の遺物がそれぞれ包含されている。淡褐色粘質土と青色粘質土に挟まれる暗灰色粘質土は、今回の調査では明瞭に時期を決めうる出土遺物は認められなかったが、第1次調査区ではこの層中に流木と考えられる木片や、古墳時代と弥生時代の土器小片が検出されている。この遺物の示す時代は上下にそれぞれ堆積する土層中の遺物の示す時代と矛盾しない。

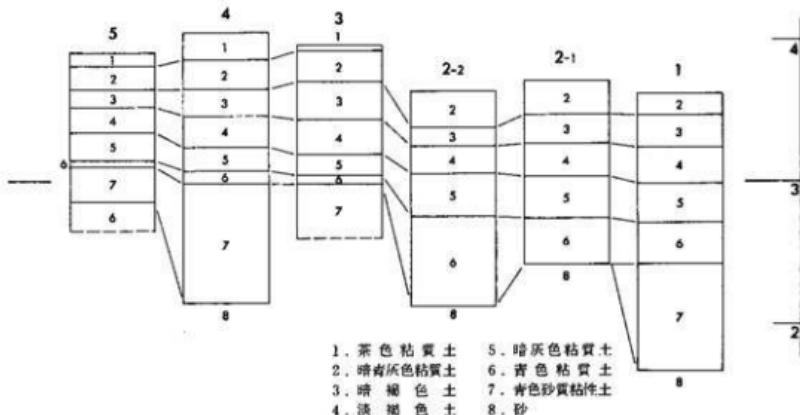


図6 土層模式図 (1/40)

また、第1次調査区と二次調査区の土層を比較すると、双方とも遺物包含層としての暗褐色土層、淡褐色上層が検出されており、相似した様相を示すが、これらの下層では第1次調査区で検出された薄い緑白色土層が、二次調査区では検出されず、また、弥生時代の遺物を包含する粘質土及び砂質粘質土も二次調査区の方が青色が濃い。

また、二次調査区では計6ヶ所で土層の柱状図を作成したが、弥生時代の遺物を包含する青色粘質土は調査区南半では厚いが、北ではごく薄いものとなっている。遺物も1区からの出土が殆どであった。

中世・古代の遺構 暗褐色土層は、層厚0.2~0.3mで粘性は低い。特に1~2区にかけて遺物が含まれており、北へゆくほど色も淡く、遺物の出土も稀になる。精査したが遺構は認められなかつた。

この下層の淡褐色粘質土中には中世から古代の遺物がわずかに含まれており、層中から鹿骨片が検出された。この土層中に含まれた須恵器片のうちには墨書きをもつものが1点あった。

鹿骨は、第IV章にみるように中足骨で、一抱えもある塊石とともに検出されている。その他にも細かい破片となった骨片、角片が採集されている。また、これらの骨片はいずれも藍鉄鉱の結晶が付着したため、鮮やかな青色を呈している。これらの鹿骨等の出土状態には特に意図的な配列は認められなかった。

淡褐色粘質土下層の暗灰色粘土上面からは、2列に並ぶ杭列が検出された。

杭列は、幅0.9~1.2mの幅でほぼ平行に並んでおり、その向きは北から約30度西へふれている。東側の杭列は、調査区内で8本、西側では5本が検出されており、杭は0.3~0.4mの間隔で打たれている。東側の杭列には、木片や植物繊維が杭列と方向を同じくして並んでおり、打ち並べた杭を利用してしがらみ状のものが作られていたか、杭列に流木などがとどまった状況を示すものと考えられる。また、この付近の木片には1.5mにも及ぶものがある他、一抱えもある塊石も検出されている。

打ちこまれた杭は、残存長40cm前後のものが多いが、なかには検出面から10cm余りで先端になる

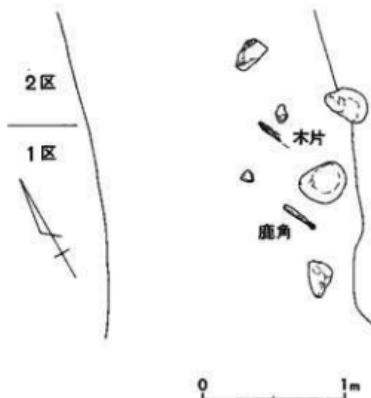


図7 鹿骨出土状態実測図(1/40)

ものもあり、杭列は暗灰色土上面で検出されてはいるが、打ち込んだ面は、暗褐色土あるいは淡褐色土にあるものと考えられる。第1調査区で検出された杭列は同様の杭ながら、暗褐色土、淡褐色土中に杭が残っており、今回検出したものよりも約0.7m深いところに打ち込まれていることになる。

この2列に並ぶ杭列周辺にはかなり大きな塊石も認められ、整備された水田などに伴うものとは考えにくい。

杭は直径5cm前後の丸太の枝をはらって先を尖らせたもので、刃物による切り口は鋭い。

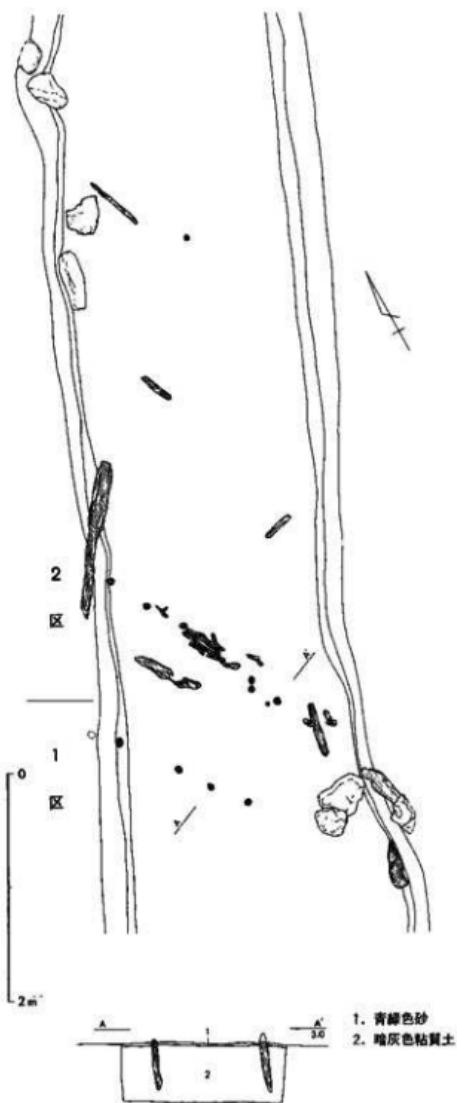


図8 杭列検出状態実測図 (1/50)

中世、古代の遺物 今回の調査では、暗褐色土層、淡褐色上層から中世、古代の遺物が出土している。(1)～(53)が暗褐色土層からの出土、(54)～(73)が淡褐色土層からの出土で、(74)～(76)は表採品である。出土遺物は土師質土器を主とし、これに若干の須恵器が加わる。

1区暗褐色上層出土の(1)～(39)は、土師質土器と少量の須恵器からなる。(1)～(23)は土師質土器の高台のない杯で、底部の径4cm前後のやや小形の(1)～(9)、底部の径7cm前後の大型の(10)～(23)に分類することも可能である。残存状態の良好なものでは底部に回転糸切り痕をとどめ、観察できるかぎりにおいては、静止糸切りによる切り離しはごく少ない。体部の内外面は回転ナデを施している。やや小形のもので全形のわかるものでは、(8)は体部が内湾し、(9)は体部が大きく開いている。大型のものでは全形のわかるものはないが、(10)は、大きく開く浅い杯部をなすようである。また、底部は平底のものと、わずかに上げ底になるものがある。(24)～(28)は、土師質土器の高台のある杯で、ごく低い高台の(24)、しっかりした高い高台を有する(25・26)がある。高い高台を有するものは、平底の杯として作られた後に高台が貼り付けられたことが、接合痕で観察できる。(29)～(33)は、脚付の杯と考えられるもので、やや長い脚を有する(29)と、短く太い脚の(30)～(33)がある。(34・35)は高杯の一部と考えられる。(36)は土師質の甌、(37)は土師質の皿であろう。(38・39)は須恵器で、(38)は輪状つまみを有する蓋、(39)は底部に回転糸切り痕をとどめる杯である。

2区暗褐色土出土の(40)～(50)は、(40)が白磁、(41)～(49)が土師質土器、(50)が須恵器である。(40)は直立の高い高台を有する割花文碗である。(41)は平底の杯、(42)は径のやや大きい杯である。(43)はしっかりした高台をもつ。(44)～(49)は脚付の杯で、ごく低い(44・45)と長い脚の(47)～(49)がある。(50)は須恵器の杯片と考えられる。

3区暗褐色土出土の(51)～(53)は、(51)が須恵器底部、(52)が土師質土器杯、(53)は脚付の杯である。

1区淡褐色土出土の(54)～(64)は、土師質土器(54)、(56)～(61)と須恵器(55)、(62)～(64)からなる。土師質土器は、高台のない杯(54)、(56)、(61)と高台をもつ杯(57)～(59)、脚付の杯(60)がある。須恵器には底部に回転糸切り痕をもつ(55)、杯(62)、蓋(63)、平瓶口縁(64)がある。(57)は内黒でヘラミガミを施す。(62)、(64)は古墳時代後期のものと考えられる。ここでは、これらの他に墨書をもつ須恵器片1点(77)が出土している。

2区淡褐色土出土の(65)～(70)は、土師質土器(66)～(67)、(70)と須恵器(65)、(68)～(69)がある。(65)は肩部につまみのつく短頸甌である。

土師質土器には、高台のない杯(66)～(67)、高台をもつ杯(70)がある。(70)は杯底部を静止糸切りで切り離した後に高台を貼り付けており、内面は内黒でヘラミガキを施している。須恵器杯

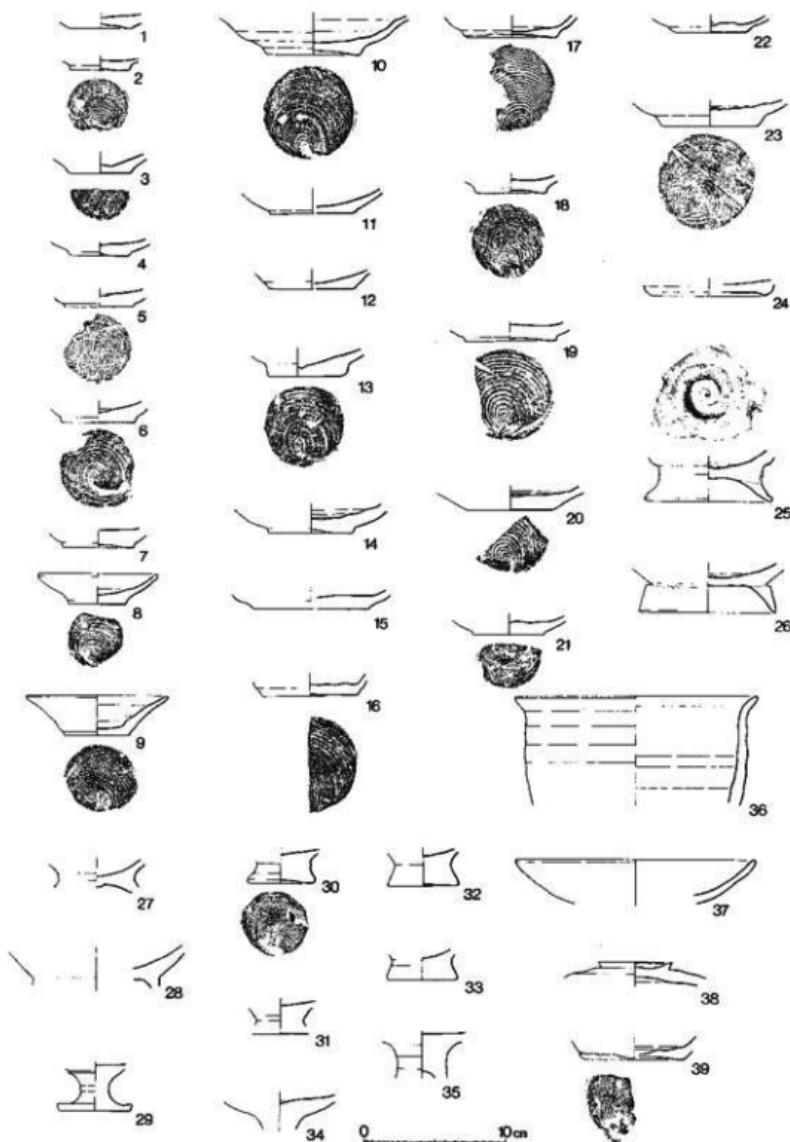


图9 中世、古代遺物実測図(1) (1~39: 1区暗褐色上)

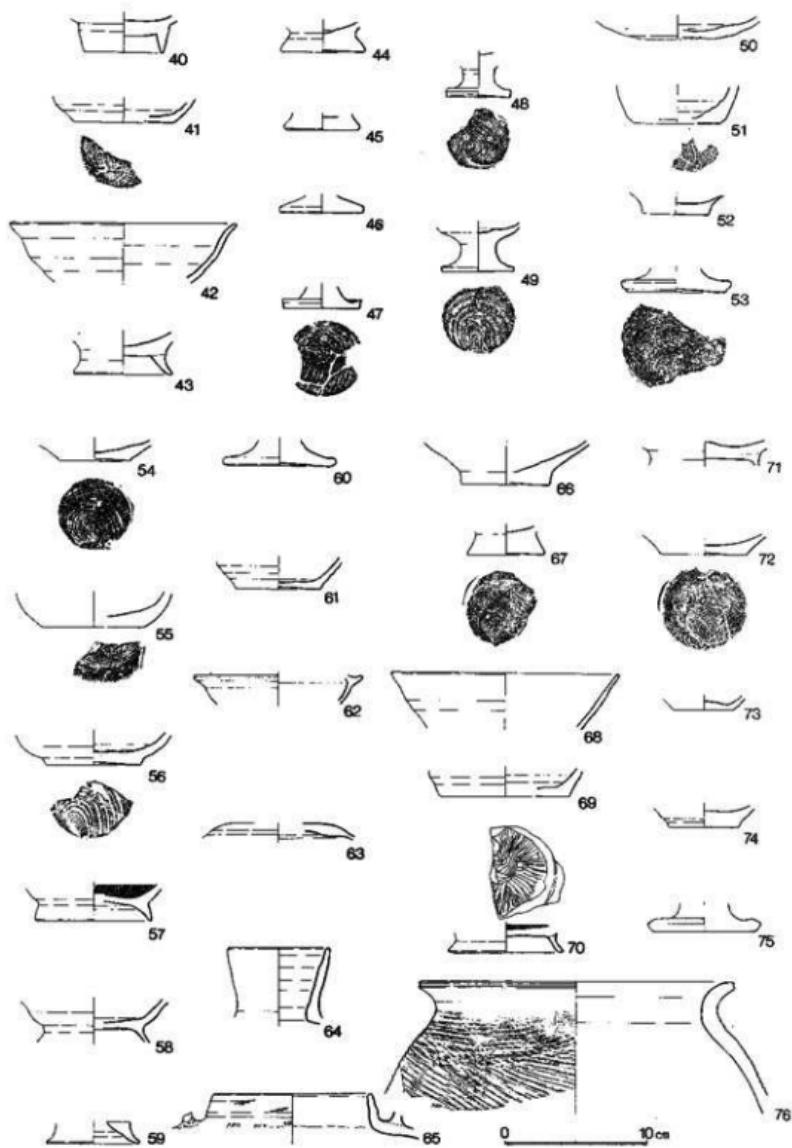


图10 中世、古代遺物実測図2 (40~50: 2区暗褐色土、51~53: 3区暗褐色土、
54~64: 1区淡褐色土、65~70: 2区淡褐色土、71~73: 3区淡褐色土、74~76: 表採)

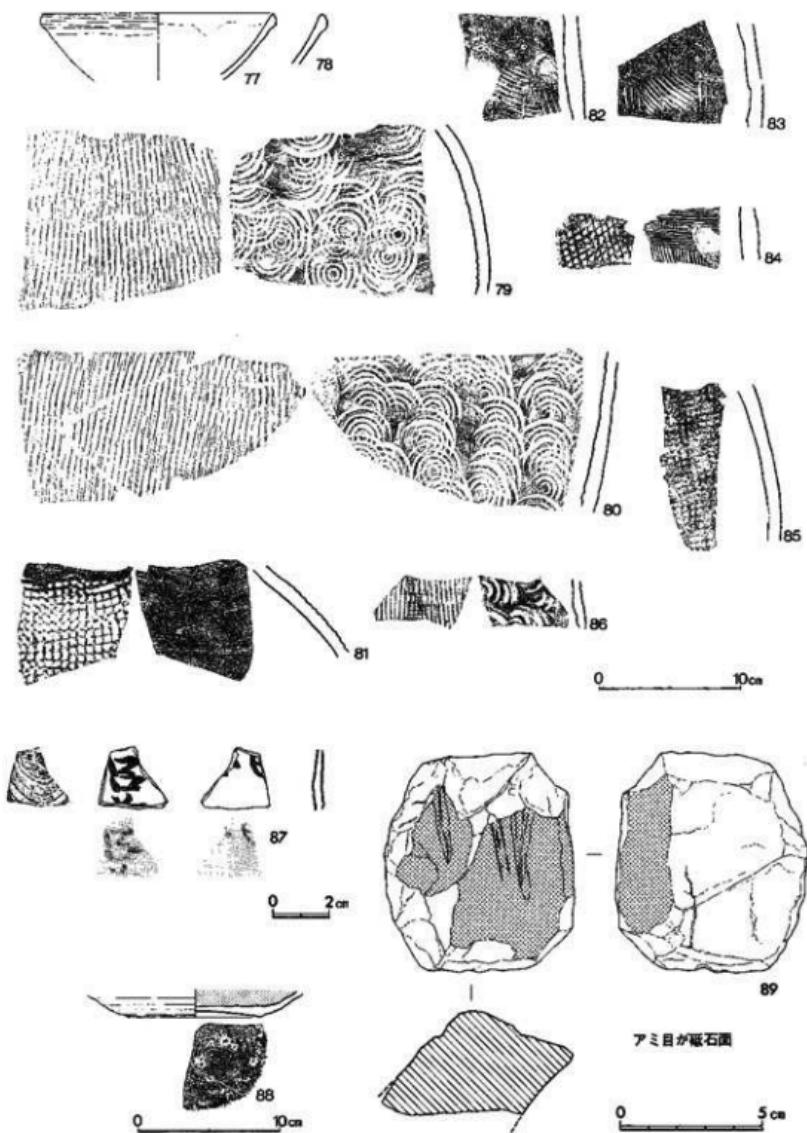


図11 中世、古代遺物実測図(3)

(68・69)はやや大形のもので、ともにもちろん同一個体のものである可能性もある。

3区淡褐色土出土の(71)～(73)は、いずれも土師質土器の杯で、高台を有する(71)、高台のない(72・73)がある。

周辺での表採品(74)～(76)は、土師質土器の杯(74・75)と、須恵質の壺(76)がある。

(76)は、外方に短く折れ曲がる短い口縁部を有し、その端面に1条の沈線を施す。体部の外面は左上りの平行線の粗いタタキメをとどめる。内面はなでて仕上げており、焼成は堅緻である。

(77・78)は白磁の碗で、やや小ぶりの玉縁を有し、器壁はやや薄い。(77)の胎磁は灰白色、(78)は淡灰色、いずれも釉薬は淡灰色である。(77)が3区暗褐色土、(78)は1区暗褐色土からの出土である。この他にも青磁の小形品の口縁と考えられる小片がある(図版7下段)。

(79)～(86)は中世須恵器である。(79・80・83)が1区暗褐色土、(84・85・86)が2区暗褐色土、(81)が3区暗褐色土からの出土で、(82)が表彩品である。

(79・80)は外面に粗い条線状のタタキメ、内面に同じ円状のタタキメをもつ。内外面とも深いタタキメをとどめる。ともにやや軟質の焼きあがりで、同一個体の壺の破片と考えられる。(81)は、外面に一辺6mm程度の格子のタタキメ、内面はタテハケのちナデで整える。焼成はやや軟質である。やはり大形の壺肩部と考えられる。(82・83)は、常滑窯系のもので器種は不明である。双方とも外面に粗く深いハケ状の工具による条線をとどめる。長石を含み、焼成は堅緻で部分的に灰を被る。(83)は内面に粘土の接合痕をとどめる。(84)は外面に5mm前後の菱形の格子タタキメ、内面にタテののちのヨコのハケメをとどめている。(85)は一辺4mm前後の浅い格子タタキメ、内面にナデを施すものである。焼成は軟質である。(86)は外面に平行のタタキメ、内面に同心円状のタタキメをもつ。やや軟質のものである。器壁やや薄く、小形品の破片と考えられる。

(87)は墨書土器で、1区淡褐色土出土の須恵器杯底部片で、底面側に回転糸切り痕、内面側に回転ナデ痕をとどめている。器壁は0.3～0.4cmと薄い。胎土にはさほどの砂粒を含まず密で、灰白色を呈している。墨書は内外面に認められるが、小片のため意味は判然としない。底面側には「呂⁽¹¹⁾」、内面側にある墨書は判読できない。

(88)は、2区出土の須恵器皿で、暗褐色土と淡褐色土出土の破片が接合した。底部に回転糸切り痕をとどめる。径は15cm以上のものである。内面に墨が付着しており、硯に転用されたものである。

(89)は砂岩質の砥石破片で、3面に砥石面をとどめる。砥面は度重なる使用によって内凹みとなっている。また、2面に施溝をとどめる。

弥生時代の遺構・遺物 標高2.7mから1.7m前後に位置する青色粘質土および青色砂質粘性土には弥生時代の遺物が含まれていた。また、青色粘質土内から、炭化物を多く含む浅い土坑1が検出された。また、遺構に伴わない土器もかなりまとまった状態で出土している。

弥生土坑、青色粘質土内に掘り込まれたもので、土坑は長さ1.0m、幅0.4mの長円形のもので、深さは0.05mと浅い。土坑内には炭化物を著しく含む灰色粘質土がつまっている。これら炭化物にまじって弥生時代中期の土器が含まれていた。

この土坑に含まれていた弥生土器は壺口縁(90)と、壺口縁(91)で、(90)は大きくラッパ状に開く口縁部で端部を下方に折り曲げている。(91)はわずかに内傾し、端部はナデで平坦にする。口縁下に指押印による刻目突起文を貼り付け、その下に3本単位の櫛描刺突文をめぐらせる。これは、青色粘土内出土の(93)と同一個体である。(93)によれば、もう1段の櫛描刺突文がめぐるようである。

包含層内の弥生土器、青色粘質土および青色砂質粘性土内に弥生土器が含まれていた。土器は、遺構に伴っての出土ではないが、かなりまとまっている上に殆ど磨耗が認められず、洪水等によって流されてきたものではなく、原位置に近い地点からの出土と考えられる。これらの土器は主に1区から出土し、1区内でも西辺沿いに特に多く認められた。

土器は、弥生時代中期のものを主とし、これにわずかであるが弥生時代前期のものを混えている。

(92)は弥生時代前期の壺で、肩部にヘラによる沈線で区画された羽状文をもつ。(93)は壺口縁で、前述の(91)と同一個体と考えられる。口縁端部を平坦になで、

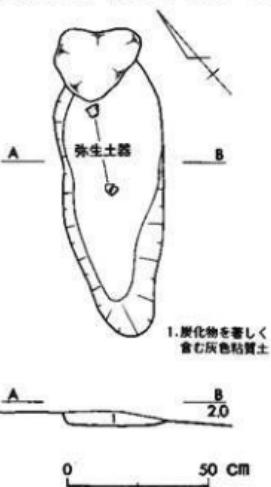


図12 弥生土坑実測図（1/4）



図13 弥生土坑出土遺物実測図
(1/4)

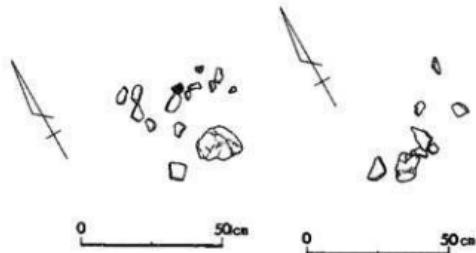


図14 弥生土器出土状態実測図(1)

図15 同左(2)

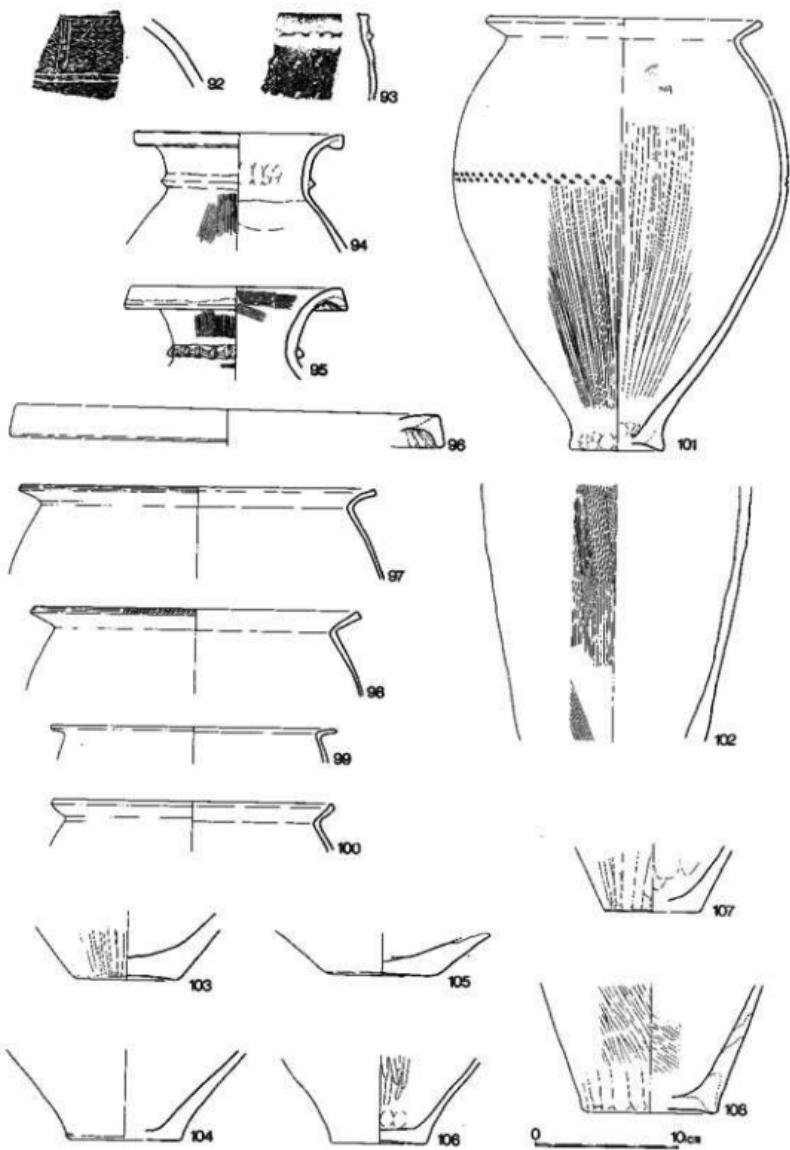


図16 弥生土器実測図 (1/4)

口縁下に指頭圧による刻目突帯文を貼り付け、その下に3本単位の櫛描刺突文を2段にめぐらせる。(94・95・96)は弥生時代中期の壺形土器で、(94)は大きく開く口縁端部を下方に折りまげて、肥厚した口縁をつくる。頸部最下段に1条の突帯文を貼り付けている。(95)は大きく開く口縁端部に粘土紐を貼り重ねて下方に垂れる口縁部としている。頸部最下段に指頭圧のちへラで刺突する刻目突帯文を1条貼りめぐらせている。(96)も(95)とはほぼ同様の口縁部であるが、やや大形品である。(97)～(101)は壺で、短く折れ曲がる口縁を有し、口縁端部に(97)は1条の沈線を、(98)はヘラによる刻目を施す。ほぼ全形を知りうる(101)は、小さく上げ底の底部から徐々にふくらんだ胴部をもち、短く折れ曲がる口縁を有する。胴部外面はタテ方向のヘラミガキを施す。内面のミガキが太く、粗い。肩部内面直下にはかすかにハケメをとどめる。外面胴部最大径付近にヘラ状工具による刺突文が1段めぐらしている。肩部外面にススが厚く付着している。(102)は円筒形を呈する壺胴部で、外面には粗いタテハケをとどめており、また厚くススが付着している。(103)～(108)は底部で、(104)、(107)以外は上げ底となっている。調整が観察可能なものは内外面ともヘラミガキで仕上げている。残存状態の良好な(108)では、断面で粘土紐を積み上げた様子が観察できる。外面の底部付近にはごく太いミガキ調整を行ない、それ以上を細いミガキによって調整する。内面にも細いヘラミガキを施す。この土器では、内外面とも底から4cm前後以上が褐色に変色している。

これらの遺物は、(92)が弥生時代前期後半に、それ以外の遺物は、壺形土器の大きく朝顔形に開く口縁部、頸部にめぐらされる突帯文などから、弥生時代中期中葉に位置付けておきたい。

IV. 名分塚田遺跡より検出されたシカの骨について

鳥取大学医学部解剖学第2講座 井上貴央

1. はじめに

名分塚田遺跡は島根県八束郡鹿島町の低湿地に存在する弥生時代中期から鎌倉時代初頭にかけての複合遺跡であるが、このたび、奈良～鎌倉時代の遺物包含層より、動物遺存体の検出をみた。取り上げられた骨は、当初、人骨ではないかと考えられ、鳥取大学医学部法医学教室の井上晃季助教授のもとに届けられたが、動物の骨であることがわかり筆者に同定を依頼されたものである。

これまで山陰両県からは、数多くの縄文時代、弥生時代の動物遺存体が検出されているが、奈良～鎌倉時代のものは極めて少ない。筆者の知りうる限りでは鳥取県鳥取市秋里遺跡から検出された鹿角がある程度である。

今回検出された動物遺存体は、保存状態がいいとはいがたいが、動物種や部位を同定できた骨が数点含まれており、貴重な資料となるものである。また、本遺跡はかつて縄文時代の動物遺存体が検出された佐太講武貝塚と地理的に近い場所に立地しており、動物相の変遷を知ることが期待できよう。

2. 検出状況と骨表面に付着していた“青色物質”

検出された骨は表採品が1点、1区淡褐色土層から5点、1区暗褐色土層から1点、2区暗褐色土層から2点、2区淡褐色土層から1点、の合計10点である。

検出された骨は完形なものが1点あるのみで、他はすべて数cm内外の骨片である。骨はこのように細片化しているものがおおいが、水による摩耗はほとんど認められないようである。骨の形態からみて、細片化しているものは人為的に割られたものである可能性が高いが、加工痕は認められない。

骨の表面には鮮やかな青色を呈する顔料のようなものが付着していた。一見すると、この“青色顔料”は、人為的に骨の表面に塗布されたような感をうける。しかし、詳細にこの“顔料”を観察すると、骨の表面のみならず、骨の破断面にあらわされた海綿質の中にも認められた。さらに、骨の一部を人為的に割って新しい破断面をつくると、その中にも“青色顔料”が認められた。このように、新鮮な破断面にも“青色顔料”が認められたことは、この顔料が人為的に骨表面に塗布されたものではないことを示している。ところで、各地の低湿地遺跡から検出される骨には、暗青色を早

する藍鉄鉱の付着をみると多い。本遺跡から検出された骨に付いていた“青色顔料”は典型的な藍鉄鉱と比べてみると、色調が非常に鮮やかである。この“青色顔料”を実体顕微鏡で拡大して観察すると、鮮やかな青色を呈する部分は微細顆粒状の物質からなり、これに混じって暗青色の藍鉄鉱の結晶塊が島状に入り組んでいる様子が観察された。つまり、裸眼では認められなかった微細な藍鉄鉱が顕微鏡下では数多く認められたのである。したがって、色が鮮やかであって、一見“青色顔料”と思われた物質は、鉄化合物である可能性が高く、人為的に骨に塗布したものではなく、還元性の環境下で自然に形成された二次鉱物であると断定できる。

3. 検出骨

検出された動物遺存体の一覧を表1に示した。1点を除くと他はすべて骨片であるので、動物種や部位は特定できないものが多い。表に記した“長骨”片は四肢骨の一部であろうと考えられる。表面は“青色顔料”で被われているため、その詳細な観察は不可能であるが、人骨に認められる細かい縦方向の線条は認められないようであり、動物骨の可能性が高い。

鹿角と同定されたものは、破断面に鹿角特有の髄構造がみとめられ、左右は特定できないもののシカの角の一部であることには間違いない。加工された鹿角の残りであると考えられる。

検出された動物遺存体のうちで最も保存状態のよかつた中足骨は、骨の前面に発達する溝や水平面の形状からシカの中足骨と同定されたものである。その長径は、約24cmであり、成獣のシカである。この他にも、中足骨片？としたものが1点、中手骨片が1点検出されている。これらの2点の骨は、大きさが完形な中足骨に比べて小さく、別個体の幼獣である。つまり、本遺跡から検出されたシカの遺存骨は最小限2個体のものが含まれているとみることができる。

4. 考察

本遺跡から2頭分のシカの骨が確認されたが、さらに若干の考察を加えたい。シカはイノシシとともに縄文時代から狩猟対象となっており、近くの佐太講武縄文貝塚からも出土をみている。縄文時代や弥生時代のシカやイノシシの遺存骨をみると、ほとんどすべての主要四肢骨は骨髓摘出のために打割を受けており、脳も骨髓摘出のために割られていることが多い。また、今回検出された中手骨や中足骨は、骨角器を作るために、加工されているものがしばしば認められる。本遺跡から検出された骨は、数も少なく、保存状況も悪いので、これをもって奈良～鎌倉時代のシカの解体様式やシカとヒトとのかかわり合いを論じることには無理があるかもしれない。しかし、あえて、今回

検出された骨から論じるとすると次の3点が浮かび上がってくる。

まず、第1に、保存状態のよかつた左中足骨がほとんど原型を保っており、骨齧摘出はもとより、加工の痕跡が認められることである。山陰地方から検出される縄文遺跡のシカの中足骨には、完形の物はこれまで検出されておらず、これより時代の新しい本遺跡から検出された中手骨は完形であったことに注目する必要があろう。これは、ひとつには鉄器などの道具の発達とともに、シカの中手骨を利用する必要性がなくなってきたせいかもしれない。第2点としては、鹿角が小さな一部分として検出されていることである。これには明瞭な加工痕は認められなかつたが、鹿角を叩き割って加工した残りの部分とみることが出来る。中手骨がほぼ完形で検出しているのに、鹿角だけがこの様に細片化しているのは不自然だからである。鹿角は、刀子の柄などとしての利用価値があったのであろうと考えられる。第3点は“長骨”片の割れ方である。検出個数が少ないため、断定は避けたいが、縄文遺跡や弥生遺跡からの獸骨に認められるような螺旋破壊（spiral fracture）によって打割を受けたのではなく、これとは違った形式によって人為的に割られたようにみうけられる。今後の発掘調査によって検出骨の数が増えた時点で再度検討したい。

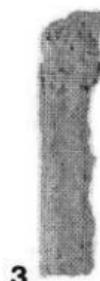
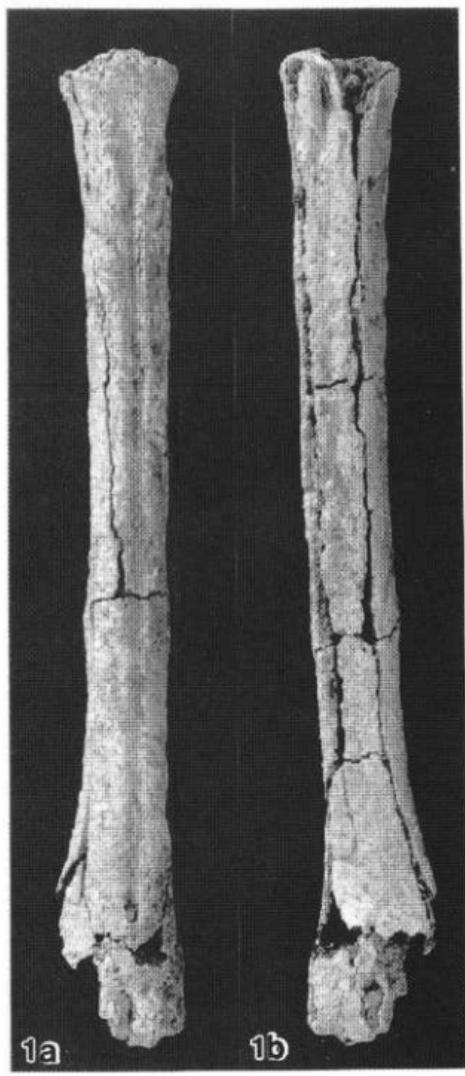
5. おわりに

今回検出された動物遺存体で確認できたのはシカの一種類であったが、今後、イノシシやイスなどの骨も期待でき、これまで空白に等しかった奈良～鎌倉時代における動物相が次第に明らかになるものと思われる。これにともなって、飼育や解体様式がどのように変遷していったのかという点も解明されるかも知れない。今後の発掘調査に期待したい。

稿を終るに当たり、動物遺存体の研究の機会をあたえられた鹿島町教育委員会の各位、鳥取大学医学部法医学教室の井上晃孝助教授に感謝申し上げる。なかでも、調査担当者の赤沢秀則氏には層序の確認や検出状況を知る上で助言を頂いた。記して感謝申し上げる。

表1

検出順序		部位	動物種名
表	採	“長骨”片	不明
1区 淡褐色土層	骨	片	不明
1区 “	骨	片	不明
1区 “	中足骨片	?	不明
1区 “	中手骨片	片	シカ
1区 暗褐色土層	鹿角	シカ	シカ
1区 淡褐色土層	左中足骨	シカ	シカ
2区 暗褐色土層	骨	片	不明
2区 “	“長骨”片	片	不明
2区 “	骨端部	片	不明



2cm

シカ骨写真

- 1:シカ中足骨 (a:前面、b:後面) 2:鹿角 3:シカ中手骨前面近位端
4:シカ中足骨?後面

V. 小 結

名分塚田遺跡は、一次調査に際して検出した中世遺物の包含層および杭列の遺構は、二次調査においても検出され、さらに、弥生時代中期のほぼ純粋な包含層が検出されたことも成果の一つに挙げうるであろう。今回の調査によって、この遺跡は、古代、中世の遺跡であるばかりでなく、弥生時代の遺跡としても注目すべきことが明らかとなった。出土遺物をみると、古代、中世を中心とする遺物と、弥生時代中期の遺物があり、この3つ時期に遺跡のピークを認めることができる。

中世の遺物は、土師質土器が大半を占め、これに中世須恵器と少量の輸入磁器が加わる。島根県下では、石台⁽¹²⁾遺跡の出土遺物と時期的に近く、平安時代末から鎌倉時代に比定できるものと考えられる。⁽¹³⁾一方、古代の遺物は、今回の調査では少量の出土であったが、一次調査の出土分もあわせて考えるならば、須恵器は柳浦編年第4、5式に含まれるもので、奈良時代後半から平安時代前半にかけてのものと考えられる。今回の調査では、須恵器中に墨書きをもつものと、硯に転用されたものがあり、注目された。こうした遺物の出土から、調査地と道路を挟んで上面の鶴瀧山南麓平坦面に存在することが推測される遺跡は、何らかの公的性を有するものであった可能性がある。この周辺は『出雲國風上記』では島根郡生馬郷に含まれるものと考えられており、朝山皓・加藤義成の両氏は、生馬郷郷庁をまさにこの遺跡周辺に比定している。しかし、当時、郷庁なるものが実在したかどうかは疑問であり、実在したとしても当時の豪族の居館を利用したものと考えられる。しかし、いずれにせよ、注目すべき遺物であることに変わりはない。

さらにひいては、中世の遺物に輸入磁器があり、在地の中世須恵器に混じって常滑系の搬入遺物が検出されているのも、古代にひきつづいて中世にも、土豪の居館が存在したことを想像させる。

また、この古代、中世の遺物包含層から出土した鹿骨、鹿角は、当時の動物の生態や捕獲した後の利用といった面の一端を示すもので、貴重な成果といえる。今後はこうした面にも注意したい。

また、最下層である青色粘質土、青色砂質粘性土からの弥生時代中期の遺構、遺物は、出土地が弥生時代前期後葉からの佐太前遺跡と指呼の距離にあり、その関連が注目される。また、遺物の示す時期は、弥生時代の分村が積極的に行なわれた時期であり、そういった面でも注目することができよう。

今次の調査でも、講武盆地での農業生産の展開といった面、また、集落の成立と時代をおってのその展開といった面で、多くの貴重な成果をあげることができたといえよう。

注1. 山本清「佐太講武貝塚」(『講武村誌』 講武村誌刊行会 1955年)

2. 金闇丈夫「島根県八束郡古浦遺跡」(『日本考古学年報』16 1963年)

金闇丈夫・小片丘彦「着色と変形を伴う弥生前期人の頭蓋」(『人類学雑誌』第69巻3・4号)

1962年)

3. 山本清「佐太前遺跡」(『講武村誌』 講武村誌刊行会 1955年)
『佐太前遺跡』 鹿島町教育委員会 1987年
4. 「志谷奥遺跡」 鹿島町教育委員会 1976年
5. 「南講武小廻遺跡」(『鹿島町埋蔵文化財緊急調査報告書1』 鹿島町教育委員会 1986年)
6. 「奥才古墳群」 鹿島町教育委員会 1985年
7. 「菅田考古」16 島根大学考古学研究会 1983年
8. 「名分丸山古墳群測量調査報告書」 鹿島町教育委員会 1984年
9. 中澤四郎「講武村條里の研究」(『講武村誌』 講武村誌刊行会 1955年)
10. 「講武地区保営圃場整備事業発掘調査報告書1 名分塚口遺跡」 鹿島町教育委員会 1984年
11. この墨書きの文字は、本館風行書体と考えられる。(松江市在住の書家 曾田左南氏のご教示による) なお、「呂」という文字そのものを『出雲國風土記』でさがすと以下のようになる。

郡	条	用例	備考	郡	条	用例	備考
意宇郡	郡名由来	毛曾呂毛曾呂	万葉假名	秋鹿郡	惠攝演	鷲根郡大領社鷲根訓麻呂	人名
安来郷	語	猪	麻呂	人名	〃	能呂志嶋、能呂志演	地名
出雲神戸	慤野加武呂乃命	神名	出雲郡	新造院	大領佐底麻呂	人名	
新造院	日置君鹿麻呂	人名	大原郡	〃	大領勝部臣蟲麻呂	〃	
神社	都神志呂社	神社名	〃	〃	斐伊鄉人種印支知麻呂	〃	
鷲根郡	入海近志呂	魚名	〃	神名	等々呂吉社	神社名	

これをみるとかぎりにおいては、「呂」は個有名詞、とりわけ人名に使用頻度が高く、本例も墨書きにおいてしばしばみられるように、使用者を特定するものであった可能性がある。ただし、本例は杯内面にも墨書きがあるので、単なる食器としての用途以外の目的があった可能性も考慮する必要があろう。

12. 「石台遺跡——馬橋川河川改修に伴う発掘調査報告」 島根県教育委員会 1986年
13. 柳浦俊一「出雲地方における歴史時代須恵器の編年試論」(『松江考古』3 1980年)
14. 朝山皓「餘戸の里」(『講武村誌』 講武村誌刊行会 1955年)
15. 加藤義成「修訂出雲國風土記参究」(今井書店 1981年)

なお、一次調査の報告(注10書)において、「今回の調査地点での出土遺物は、全くの日常雑器ばかりで『郡庁』はおろか、豪族の屋敷等が周辺に存在することを推測させるものはない。」としたが、わずか1点づつではあるが、墨書き土器や転用鏡が出上したことによって、そういう可能性も追求する必要が生じたことを認めなければならない。前回の言及は今回撤回する。

出土遺物観察表(1)

測定 番号	器種	法 量(cm) 口径 底径 高さ	形態・手法の特徴	色 調	粘 土	燒 成	備 考
1 (上部質)	杯	- 4.1 -	底部回転糸切り、内面回転ナデ	淡灰褐色	φ 1mm以下の砂粒 多い。	やや不良	
2		- 4.2 -		淡赤褐色		不良	
3		- 4.2 -		淡灰褐色			
4		- 4.2 -					
5		- 4.8 -		淡灰色 断面/淡褐色	微粒子含む	良好	
6		- 5.2 -		淡灰褐色	少々含む。	やや不良	
7		- 5.0 -		黄褐色	微粒子含む。		
8		8.2 4.0 2.2		淡赤黃褐色	φ 1mmの砂粒少量 含む		
9		10.0 4.6 2.8			微細		
10		- 6.4 -		淡灰褐色		不良	
11		- 6.0 -			φ 1mmの砂粒を少 量含む。それ以下 のもの多い。	やや不良	
12		- 6.0 -				不良	
13		- 5.1 -		淡赤褐色	φ 1mm前後のもの 多い。		
14		- 5.8 -		淡灰褐色		やや不良	
15		- 8.2 -		淡褐色	微粒子含む。		
16		- 6.6 -		淡赤褐色	φ 0.5~1mmの砂粒を 多く含む。	不良	
17		- 6.0 -		灰白色	細砂粒を含む。	良好	
18		- 5.0 -		外面/淡灰褐色 内面/淡赤褐色	φ 1mm以下の砂粒 多い。	やや不良	
19		- 6.4 -		灰褐色	微粒子含む。		
20		- 6.0 -		外面/淡赤褐色 内面/淡灰褐色	φ 1mm以下の砂粒 やや多い。		
21		- 5.0 -		淡赤褐色	微砂粒多い。		
22		- 5.0 -		赤褐色	φ 1mm以下の砂粒 多い。φ 2~3mmの ものも含む。	不良	
23		- 6.6 -		灰褐色	微砂粒含む。		
24		- 8.0 -		淡灰褐色		やや不良	
25 高台付杯 (上部質)		- 8.6 -	内外面とも回転ナデ。内面底部は特 に強い。	外面/淡白色 内面/黑色	密	良好	
26		- 9.6 -	高く、しっかりした高台をもつ。	淡灰褐色			
27		- -	比較的小ぶりな高台をもつ。 内外面とも回転ナデ。	淡灰褐色	微砂粒を多く含む。	不良	
28		- -	しっかりした高台をもつ。器壁がい い。				
29 脚付杯 (上部質)		- 5.0 -	やや長い脚から大きく聞く底部にい たる。	灰白褐色	φ 1mm以下の砂粒 含む。		
30		- 4.5 -	太く短い脚をもつ。	淡褐色		やや不良	
31		- -		淡赤褐色		不良	
32		- 5.0 -		淡灰褐色	φ 0.5~1mmの砂 粒含む。		
33		- 4.8 -	短い脚柱をもつ。	淡褐色	φ 1mm以下の砂粒 多い。		
34		- -	太く、上半中実の脚柱をもつ。	微細			
35		- -		微砂粒含む。		やや良好	
36 盤 (上部質)		17.0 -	盤子の体部が円錐で傾曲して小さく 開く。内外面とも回転ナデ。	灰褐色	密	良好	外周厚くスス が付いている。
37 杯 (上部質)		16.8 -	浅く大きく聞く脚柱。内外面とも回 転ナデ。	明淡赤褐色	φ 1~2mmの砂粒 を少量含む。	やや不良	
38 盤 (頂部質)		- -	大井部に低い輪状つまみをもつ。	青灰色	密	良好	
39		- 7.0 -	底盤から直線的に立ち上がる体部。 底盤回転糸切り。内外面とも回転ナデ。	淡黄灰色	微粒子含む。	不良	

出土遺物観察表(2)

序号 番号	器種	寸法 (cm)	形態・手法の特徴	色調	胎	土	焼成備考	
							外径	底径
40	碗 (白・通)	-	5.6	-	高く直立する高台をもつ。内面見込 みに劃花文をもつ。	灰白色	磁窯	良好
41	杯 (土師質)	-	7.0	-	底部回転糸切り。内外面回転ナデ。	淡灰褐色	φ1mm以下の砂粒 多い。	やや不良
42		14.8	-	やや人ぶりな体態。内外面とも回転 ナデ。	淡赤褐色	φ2mm以上の砂粒 含む。	不良	
43	高台付杯 (土師質)	-	6.8	-	しっかりと高台をもつ。底部を回 転糸切りで切り離したのち高台を貼 付けた。	淡黄褐色	φ1mm以下の砂粒 多い。	
44	脚付杯 (土師質)	-	5.8	-	しっかりと低い脚がつく。	淡灰褐色	φ1mm以上の砂粒 多い。	
45		-	5.0	-			φ0.5mm以下の砂 粒多い。	
46		-	5.8	-	脚端から細い脚柱部に続く。 底部回転糸切り。	淡黃褐色		
47		-	5.4	-		淡赤褐色	φ1mmの砂粒少量 含む。	
48		-	4.6	-				
49		-	5.0	-		淡灰褐色	微砂粒多い。	
50	杯 (須志質)	-	-	-	内外面とも回転ナデ。	青灰色	磁窯	良好
51		-	6.0	-	底部回転糸切り。体部と外山面にナデ。		φ1.5~1mmの砂 粒含む。	
52	杯 (土師質)	-	5.0	-	底部回転糸切り。	明赤褐色	φ1mm前後の砂粒 含む。	不良
53	脚付杯 (土師質)	-	7.0	-	脚柱糸切りの底部からやや太い脚柱 部にいたる。	淡灰褐色	磁窯	
54	杯 (土師質)	-	5.0	-	回転糸切りの底部から直線的に聞く 脚柱部をもつ。	淡赤褐色	φ1~3mmの砂粒 少含む。	
55	杯 (須志質)	-	7.2	-	回転糸切りの底部から丸味をもった 体部にいたる。	青灰色	微砂粒含む。	やや不良
56	杯 (土師質)	-	6.6	-	回転糸切りの底部から斜曲して体部 にいたる。	淡灰褐色		
57	高台付杯 (土師質)	-	8.0	-	しっかりと高台をもつ。底面内面 内里となり、ラミガキを施す。	外面/淡赤褐色 内面/黒色	φ1mm前後の砂粒 多い。	
58		-	-	-	内外面とも回転ナデ。器壁薄い。	淡灰褐色		
59		-	6.4	-	高台部のみの破片。結合部に底部の 回転糸切り既に5ミリシングルとなって残 る。	淡灰色	微窯	不良
60	脚付杯 (土師質)	-	7.6	-	糸切りで切り離す底部からやや太い 脚柱部にいたる。	淡灰褐色	φ1mm以下の砂粒 多い。	
61	杯 (土師質)	-	6.0	-	回転糸切りの底部から直線的に聞く 体部にいたる。	淡赤褐色	微砂粒含む。	やや不良
62	杯 (須志質)	-	-	-	やや小形化した杯。内外面回転ナデ。	青白灰色	φ1mm以下の砂粒 少含む。	やや良好
63	盃 (須志質)	-	-	-	天井部形状となる。擴字状のつま みをもつものか。	灰色	φ0.5mm以下の砂 粒少し含む。	
64	盃 (須志質)	-	7.0	-	低い単純な口盤。内外面回転ナデ。	青灰色		良好
65	短頸壺 (須志質)	11.0	-	-	ぐく短い頸部から大きく鉛曲して体 部にいたる。肩部に把手がつく。肩 部にタキメをもどめる。	灰色 (輪: 青灰色)	密	良好、堅 硬、外山 面自然が かかる。
66	杯 (土師質)	-	6.2	-	底面から屈曲して大きく聞く体部に づく。	淡灰褐色	微砂粒少含む。	不良
67	脚付杯 (土師質)	-	5.4	-	糸切りの底部から太く短い脚部をも つ。	淡赤褐色	φ1mm以下の砂粒 多い。	
68	杯 (須志質)	16.0	-	-	薄い体部。内外面回転ナデ。	黑色~灰色	砂質	
69		-	9.0	-	回転糸切りの底部から直線的に立ち 上がる体部をもつ。	墨灰色	微砂粒含む。	
70	高台付杯 (土師質)	-	8.2	-	静止糸切りの底部に高台を貼付ける。 底面内面内里となり、細かくヘラミ カキを施す。	外面/淡赤褐色 内面/黒色	φ1mm以下の砂粒 含む。	普通
71		-	-	-	厚い底部に高台を貼付ける。	黃褐色		不良
72	杯 (土師質)	-	6.0	-	回転糸切りの底部から直線的に聞く 体部にいたる。	淡赤褐色	磁窯	
73		-	4.0	-	小形の杯。		φ1~3mmの砂粒 含む。	
74		-	4.8	-	回転糸切りによる底部。底部厚い。	淡灰色	磁窯	やや不良
75	脚付杯 (土師質)	-	7.0	-	厚子の脚部。	淡灰褐色	φ1~2mmの砂粒 多い。	不良

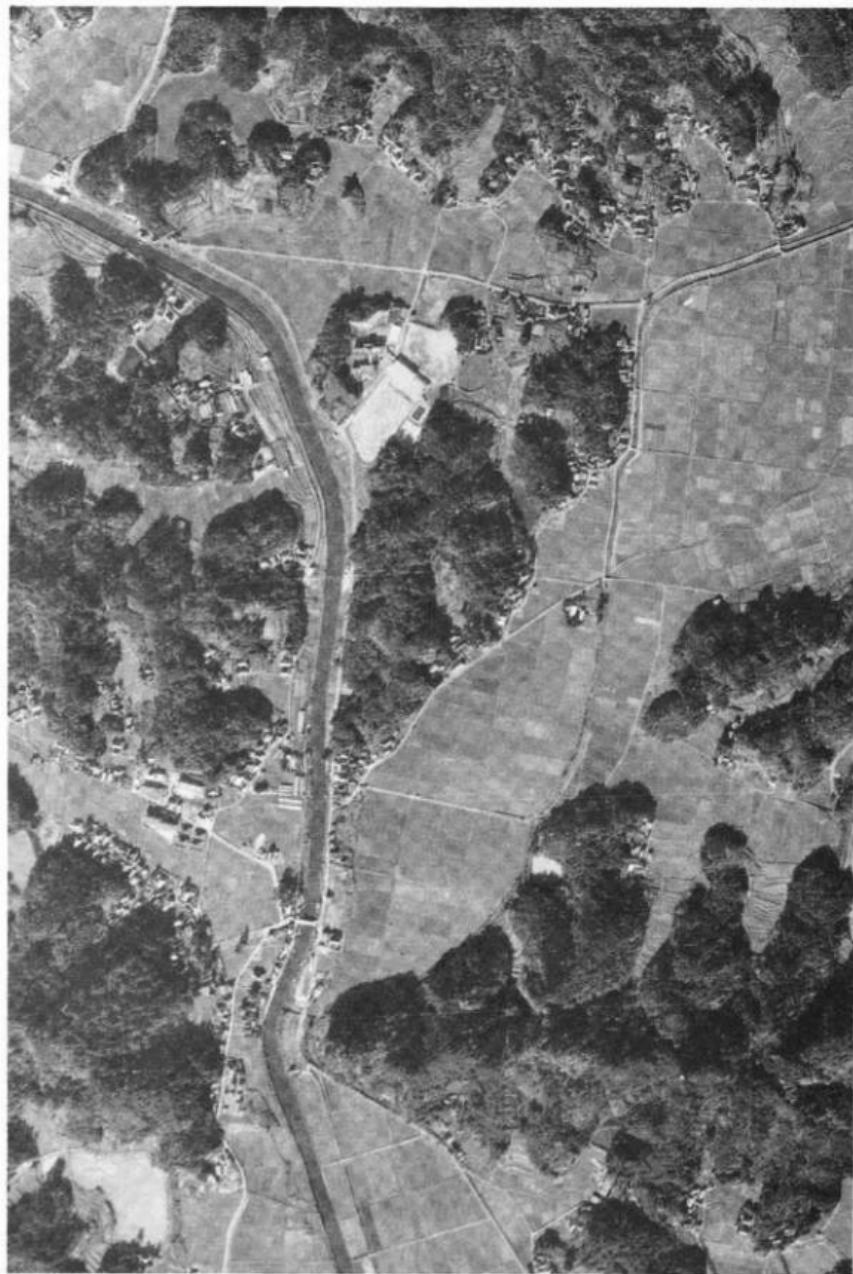
出土遺物観察表(3)

種類 番号	器種	法 量(cm) L径 底径 高さ	形態・手法の特徴	色 調	質 十	施成 備考
76 (須恵質)	壺	22.2	外反する口縁部をもつ。端部に1条の沈縫。 体部外面・紐い名残状のタタキ。 体部内面/ナテ。口縁部/側縫ナテ。	濃青灰色	6.1 ■前後の砂粒 含む。	良好。堅 板
77 (白 堀)	瓶	16.2	口縁に玉縁。薄い器壁。内外面に貫入。	淡灰色	灰白色 — 淡灰色	
78						
79 (須恵質)			外面/粗い糸縫状のタタキ。 内面/底に凹状のタタキ。 外面/辺6cmの格子のタタキ。 内面/タテハテのちぢみ。	淡青灰色	砂粒少ない。	良好
80				暗灰色		普通
81						
82 83			外面/太いハケメ。 内面/ナテ。	外面/碧緑色 内面/灰色	長石少々含むが密 度。	良好。堅 板。内面 に灰 斑。
84						
85			外面/粗く彫形の格子状のタタキ。 内面/粗いハケメ(タテ×ヨコ)。	外毛/碧緑色 内面/灰色	砂粒含まず。	普通
86						
87 (須恵質)	杯		外面/平行のタタキ。 内面/同心円状のタタキ。	外毛/碧緑色 内面/灰色	微砂粒含む。	普通
88		9.0	薄い杯底部。底面に回転刷り痕。	灰白色	砂粒含む。	内外面に墨跡、 印記を有す。
89 (墨 石)			回転刷りにより、やや上げ感にな る底部から大きめの圓底にいたる。 体部内外面同様ナテ。内面底部ナテ 強調。	淡青灰色	石英の網状物わす かに含む。	良好 印記を有す。 内山に墨が残 る。
90 発生土器 質			四角柱状の直底。約6cm。3面に縦 條を残す。うち2面には施薙が残る。	淡灰色		
91						
92						
93						
94						
95						
96						
97						
98						
99						
100						
101						
102						
103 底 部		7.0	以手のしつかした底部。やや上 昇。外面上にタテ方向のヘリミガキ。 内面は質剥付までタテ方向の(ラ ミガキ)。外面上大字付近に1段のヘ リミガキによる割れ穴。	淡灰色	6.2 — 3 ■の砂粒 を含む。	やや不良 やや不良 外面上半にス ス付着。
104		7.6	やや薄手の底版。底部から直線的に 立ち上がる崩れ。	淡灰褐色	砂粒多く含む。	
105		7.8	厚手の底版。底部から大きく開く斜 面。	淡青褐色	大粒の砂粒多く含 む。	不良

出土遺物観察表(4)

測定番号	器種	法高(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎	七	焼成	備考
		口径	底径	器高						
106	浮生上部 底部	-	6.6	-	浮手の底部。底部からやや外反気味に全体は立ち上がる。内面底部に指頭痕有。それ以上はタテ方向のヘラガキ。	灰褐色	大粒の砂粒多く含む。	不良	内山スス村石。	
107		-	6.6	-	小底部は底面から胸部は直線的に立ち上がる。外側は人いタテ方向のヘラガキ。内面はヘラケズリのちになんでるか。	外面/黒褐色 内面/暗褐色	微砂粒含む。	良好		
108		-	9.0	-	しっかりしたむずかな上げ底の底部から直線的に立ち上がる胸部を有する。前面で幅2~3cmの粘土縁の付け上げがみえる。外面底部近くに人いガキ。それ以上は細いヘラガキ。内面一部に粗いヘラガキ。	外面/黄褐色 内面/肌色	やや大粒の石英の砂粒を含む。	良好	内面一部に黒斑有り。	内外面とも底より4cm前後以上が褐色に変色する。

図 版



名分塚田遺跡周辺航空写真

図版 2



名分塚田遺跡全景



1区土層



2区1土層



2区2土層



3区土層



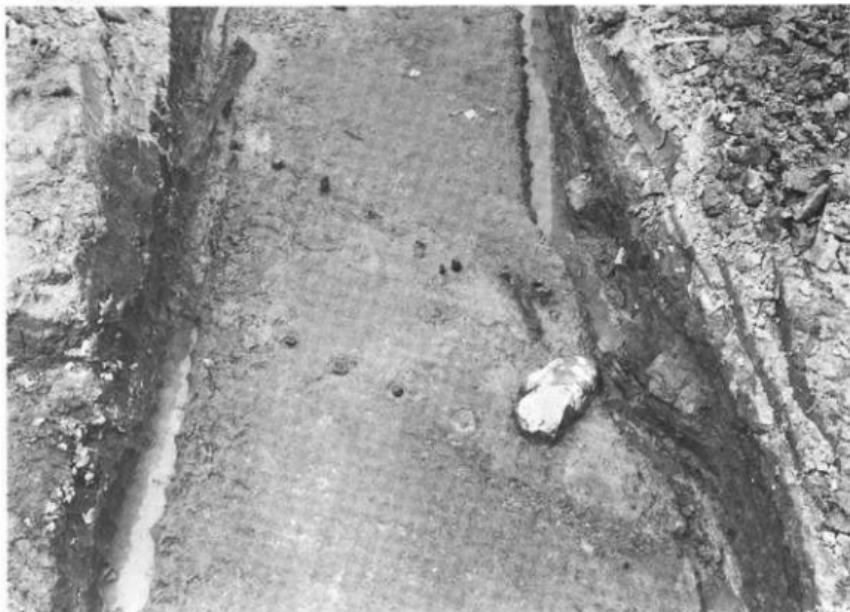
4区土層



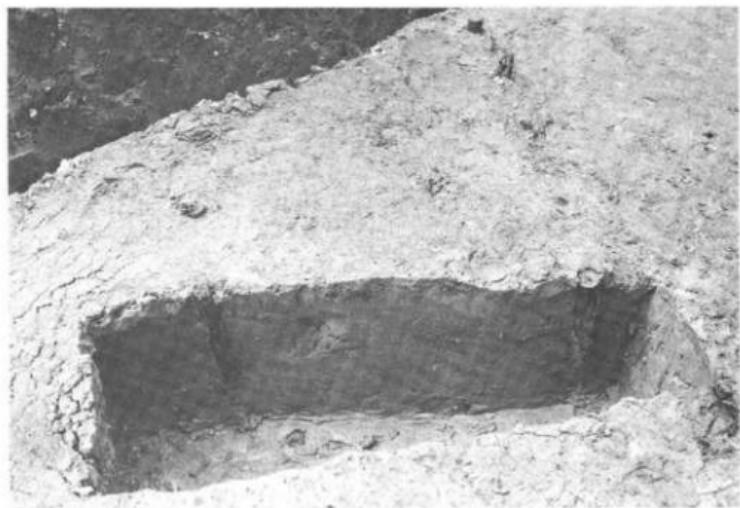
5区土層

名分塚田遺跡土層

図版 4



杭列検出状態



杭列横断面



鹿骨検出

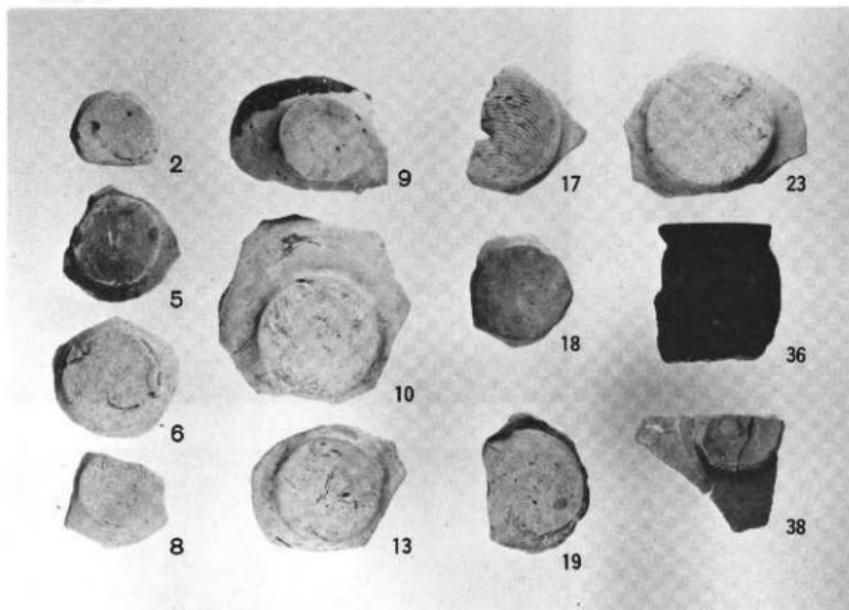


弥生土坑

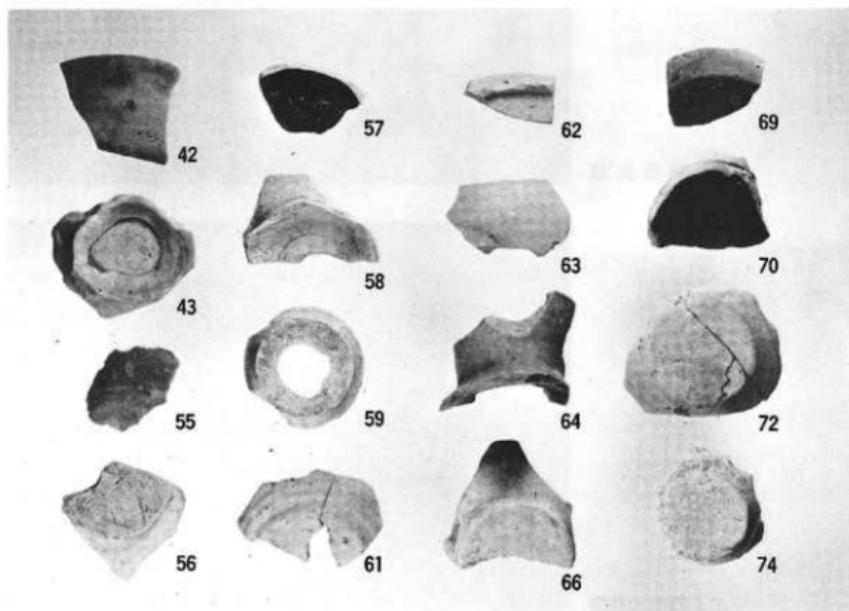


弥生土器出土状態

図版 6



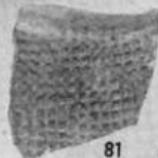
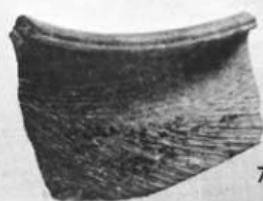
中世遺物（1）



中世遺物（2）



中世遺物（3）

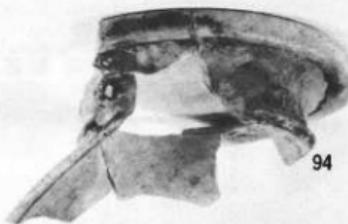


中世須恵器



磁器、転用硯、砥石

図版 8



弥生土器

講武地区県営園場整備事業発掘調査報告書 3

名分塚田遺跡 2

1987年3月

発行 鹿島町教育委員会

島根県八束郡鹿島町大字佐陀本郷640番地1

印刷 柏木印刷有限会社

松江市国屋町452-2